

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 15 日現在

機関番号：16301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580043

研究課題名(和文) 太鼓音楽史序説：誕生から海外進出まで

研究課題名(英文) Introduction to the history of taiko drum music: From its birth to its growth overseas

研究代表者

中原 ゆかり (NAKAHARA, Yukari)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：00284381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、太鼓音楽の黎明期(1950年代から1960年代)を対象に調査をおこなった。主な成果は、次のとおりである。

(1) 個人が所有する黎明期の太鼓グループの映像資料(ビデオテープ)の70本のデジタル化をおこなった。(2) 太鼓音楽が日本で誕生してから北米に普及して世界音楽となるまでの大まかな流れを把握し、著書『ハワイに響くニッポンの歌』の第6章に記した。(3) 黎明期の人気曲は、現在世界的なスタンダード曲として演奏されていることが明らかになった。(4) 黎明期の太鼓グループが構築したヨコの繋がりは、世代交代した現在まで続き、奏法上の影響関係が多くみられることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on taiko drum music in the 1950s through the '60s. Major accomplishments of this research include the following: 1) digitizing 70 privately-owned videotapes of early taiko performance groups, 2) charting the general course of taiko music from its birth in Japan to its development into a global music after spreading to North America, as I have described in Chapter six of *Hawai ni Hibiku Nippon no Uta [Japanese Songs Echo in Hawai'i]*, 3) the discovery that popular compositions from the early period are currently performed as global standards, and, 4) the finding that the horizontal ties established between the early taiko performance groups have persisted to the present day, even after generational change, as often seen in their influence on performance practice.

研究分野：文化人類学、音楽人類学、

キーワード：太鼓音楽 組太鼓 創作太鼓 和太鼓 世界音楽

## 1. 研究開始当初の背景

(1) いくつもの和太鼓を組み合わせて演奏する太鼓音楽(創作太鼓、組太鼓)は、戦後日本で誕生した最も新しい民俗音楽(民俗芸能)である。1970年前後には海外に普及し、その後北米・ヨーロッパを中心に、数多くの太鼓グループが結成された。現在日本全国に約5000個の太鼓グループがあり、海外では北米だけでも250個以上、イギリスには100以上の太鼓グループがあり、最近ではアジア、南米、オーストラリア等にも普及しはじめている。

(2) 研究代表者は、1997年よりハワイ日系の大衆音楽の調査・研究をはじめた。ハワイには1980年代から太鼓グループが結成され、日系に限らずアジア系やヨーロッパ系等多民族社会全体で人気となっている。ハワイの太鼓グループは、北米・日本の双方と密に交流して、太鼓音楽の基本的な奏法を身につけ、共通のレパートリーを演奏しながら、ハワイアンやアジア系移民の音楽をとりいれて独自の太鼓音楽を創作して人気となっていた。世界的な共通のレパートリーをもち、なおかつ地域の音楽でもあるという、太鼓音楽のグローバルな点に興味をもった。

(3) 日本全国のみならず世界へと広がっている太鼓音楽であるだけに、愛好者の数は多く、数多くの教則本や一般書が出版されている(林 1992, Varian 2005, etc)。しかしそのいっぽうで、研究の集積は意外と少ない。北米日系研究では、三世以降のエスニシティやアイデンティティの表現として太鼓音楽がとりあげられて一定の集積があるが(Otsuka 1997, Konagaya 2001 etc)、日本の太鼓音楽に関しては、茂木仁史の一連の研究(茂木 2003等)がある他は、観光や地域文化の調査報告の一部に記載されている程度である。太鼓音楽の全体像は、研究者にとっても愛好家にとっても見えにくいのが現状である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、先行研究の少ない太鼓音楽の全体像を著したいという大きな展望の第一歩として、太鼓音楽史の最初の部分にあたる、太鼓音楽の黎明期を調査し、記録することにある。太鼓音楽の黎明期とは、小口大八が太鼓音楽(組太鼓、創作太鼓)を考案して「御諏訪太鼓」を組織してから、1960年代末に北米の「サンフランシスコ太鼓道場」や「キンナラ太鼓」が旗揚げするまでの時代である。

(2) 太鼓音楽の黎明期を調査・研究するにあたっては、太鼓音楽史全体の概要を描くことを同時におこないつつ、全体の中に黎明期

を位置づけていく必要がある。そうすることによって、黎明期の状況を現在に至るまでの道のりの一部として、くっきりと描くことができる。現在みられる太鼓音楽の全体的な特徴と比較しながら、黎明期の特徴を明確にしていく。

## 3. 研究の方法

研究の方法としては、文字資料や映像音響資料の収集、現地調査という二つの方法をとった。そのあらまはつぎのとおりである。

(1) 太鼓音楽全体のおおよその概要を握るために、研究代表者が本研究以前からおこなってきたハワイ・北米の太鼓音楽についての資料を整理するとともに、日本の主要な太鼓グループに関する雑誌記事や新聞記事、既に発売されてきたレコード等の音響資料や映像資料を収集して整理と分析をすすめた。また文献やエッセイに関しては、一般書や教則本等も広く収集し、分析をすすめた。さらに「日本の太鼓」「日本縦断コンサート」等、各地の太鼓グループが集結する機会を観察することにより、太鼓音楽の全体像をつかむよう心がけた。

(2) 黎明期に主要な役割を果たした太鼓グループの中でも御諏訪太鼓を中心におき、練習やコンサート、イベント、ワークショップなどを参与観察し、その奏法や音楽的な特徴などをつかむとともに、主要人物へのインタビューをおこなった。そして御諏訪太鼓の活動を観察しながら、彼らと繋がる国内外の太鼓グループとの交流についても観察した。また個人が所有している映像資料を閲覧するとともに、劣化の激しいものはデジタル化をおこない、資料として保存できるものとするようにした。

(3) 黎明期の太鼓グループや現在の打ち手たちとのコミュニケーションの中で、本研究の意義、グループの過去を調査し記録する意義を話し合った。これは「研究のための研究」となることなく、太鼓音楽の当事者たちである「打ち手たちにとっての記録であり研究」でもあることを目指しているためである。文化人類学の分野では「公共人類学」ということがいわれており、研究代表者もそういった方向性をめざしている。

## 4. 研究成果

本研究では、太鼓音楽の黎明期(1950年代から1960年代)の調査を、太鼓音楽史の全体性の中に位置付けながらおこなった。主な成果は次のとおりである。

(1) 太鼓音楽が誕生してから北米・ハワイへと普及するまでの大まかな概要を知り、単著『ハワイに響くニッポンの歌：ホレホレ節から懐メロ・ブームまで』の第六章に記した。

太鼓音楽の誕生は、戦前ジャズ・ドラマーであった小口大八が、戦後の捕虜生活を経て故郷の諏訪へ帰り、アマチュア・ジャズバンドでドラムを打っていた頃、諏訪大社の神楽の復活を依頼されたことに始まる。小口は難解な神楽の太鼓譜を解読すると、ただ一人で同じリズムを繰り返すだけでは面白くないと感じ、何人もが力をあわせて演奏し、聴く人も感激する「新しい神楽」をつくりあげたいと考えた。苦心の末に思いついたのが、多人数でパートに分かれて打つという、いわゆる「複式複打」の方法である。小口が苦心の末に完成させた「新しい神楽」は諏訪大社で演奏されて各地から集まった氏子たちに好評となり、諏訪地域でも評判となる。周囲の人たちにより「御諏訪太鼓」と呼ばれるようになり、全国各地から習いたいという人たちが訪れて広まっていく。東京オリンピック、大阪万博や多数のメディア出演という時代の流れの中で有名になり、またアジア・ヨーロッパ・アメリカ等での公演依頼をうけた。御諏訪太鼓から教わって結成された太鼓グループは国内外あわせて600個といわれる。

小口は優れた奏者であり作曲家であり指導者であり、「日本太鼓連盟」等を結成して内外の太鼓グループどうしのヨコの繋がりをつくるという組織力をもった人物であった。2008年に突然の交通事故で亡くなっているが、彼の追悼コンサートにはアメリカ、オーストラリア、オランダ、シンガポール等から多くのプレイヤーが集まり、彼の作曲した「飛龍三段返し」を打つという“Hiryu Project”がおこなわれてインターネットをつたって世界中に配信された。その直後には、世界中のグループが「飛龍三段返し」を演奏する動画をユーチューブにアップするという現象がおきている。

黎明期のグループとして重要なのは、御諏訪太鼓の複式複打の影響を受け、東京の若い盆太鼓の名人たちにより結成されたプロの太鼓グループ「助六太鼓」である。これは御諏訪太鼓の複式複打に東京の盆太鼓の奏法（斜め置きで打つ）をいれ、さらに邦楽囃子の打ち方をも取り入れた。太鼓音楽の人気に伴い、プロ集団である助六太鼓は膨大な人数にふくれあがり、数々ずつで日本全国のイベント等によばれて太鼓を打つようになる。そしてアメリカ公演の折り、御諏訪太鼓にあこがれていたサンフランシスコ在住の田中誠一との出会いがあり、田中に太鼓セットを一式置いていくことになる。この時1968年、田中は助六太鼓と御諏訪太鼓の両方から太鼓を教わり、「サンフランシスコ太鼓道場」を設立した。

以降、田中は日本とアメリカを自由に行き来して太鼓演奏を続け、田中の弟子たちは北

米（アメリカ合衆国、カナダ）各地に太鼓グループを誕生させた。現在ある北米太鼓グループの大部分が、田中とその弟子たちの影響を受けて誕生したといわれている。田中は2001年、アジア系ではじめて米国版重要無形文化財（National Endowments for the Arts' National Heritage Fellows Awards）を受賞した。そのほかにも米本土には、仏教寺院の盆踊りからはじまった「キンナラ太鼓」、アジア系アメリカ人の運動と結びついた「サンノゼ太鼓」があり、この3つのグループが現在まで北米太鼓界をリードしている。

太鼓音楽が米本土に進出した頃、「日本の太鼓」で世界をまわるプロ集団をつくらうというもくろみにより成立したのが「鬼太鼓座」である。佐渡に拠点をおき、日本全国の民俗芸能や邦楽、バレエ等を習い、厳しい修行の末1975年にボストンマラソンで完走後に大太鼓を打つという衝撃的なデビューをはたした。小沢征爾やピエール・カルダンといったいわゆる一流の芸術家たちに認められ、アメリカ・ルアー、ヨーロッパ・ツアーを実現させていく。

鬼太鼓座は1980年に分裂して、「鼓童」と「（新生）鬼太鼓座」にわかれた。この二つのグループは北米太鼓界との交流が多く、大きな影響を与えている。例えば北米では1997年から「北米太鼓会議」という催しが2年に1回のペースで開催されるようになり、太鼓の打ち方や作り方についてのワークショップ、太鼓を打つことの意味を考える「太鼓哲学」に関するディスカッションが活発におこなわれている。この北米太鼓会議は現在では北米のプレイヤーたちにとってなくてはならないものとなったが、この催しを考案・企画したのも鼓童とサンノゼ太鼓のメンバーたちであった。

また、日本で誕生した太鼓音楽ではあるが、日本の太鼓文化に米本土の影響がみられるようになった。例えば黎明期の日本の太鼓音楽は男性だけであったが、米本土では最初から女性の参加が多かった。楽器としての和太鼓も米本土では手に入りやすく、ワイン樽等を利用して技術を工夫して和太鼓を手作りしていた。米本土での「女性の参加」「太鼓の手作り」は、日本の太鼓音楽にもそのまま影響した。さらに黎明期の日本の太鼓音楽は、「一生けんめい、真剣に太鼓を打つ」というストイックなものであり、パフォーマンスの最中は会場全体に緊張感がはりつめていた。しかし、「真剣であると同時に楽しく笑顔で打つ」という北米太鼓の表現に影響され、発展期の日本でも「笑顔のパフォーマンス」が普及したのである。

こうして日本で誕生した太鼓音楽は北米に普及し、その後はアジア、ヨーロッパ等にも広がって「世界音楽」となった。海外において太鼓音楽といえば「日本的なもの」というイメージも一部には根強いが、打ち手にとっては常に「自分たちのアイデンティティ」

の表現である。小口の創作した「飛龍三段返し」や鬼太鼓座の「秩父囃子」等が世界に共通のスタンダード・ナンバーとなるいっぽうで、どの太鼓グループも地域の音楽やルーツ等をイメージした「自分たちの太鼓音楽」を常に創造してきた。「世界の音楽」であると同時に「自分たちの音楽」であることが、太鼓音楽の普及と人気の理由であることが明らかになった。

(2) 黎明期に主要な役割を果たした太鼓グループのうち、御諏訪太鼓を中心にすえ、文字資料・映像音響資料を収集した。御諏訪太鼓の黎明期の概要は、(1)の太鼓音楽史のところで述べたとおりである。

黎明期の詳しい演奏方法や楽曲の音源をきいてみると、同じ曲でも現在までに変化がみられる。詳しいことを知るために、奏法を習って調査をすすめている途中であり、詳しい分析はまだできていないが、曲のアイデンティティの柔軟性と関連しているようである。ひとつの曲を演奏するにあたり、コンサートの場合、イベントの場合、あるいは制限時間がある場合、また演者の人数や歌手がいるかどうかなど、その場の状況に応じて柔軟に曲の内容をかえて練習している。おそらくそういった柔軟な対応の中で、演者たちの好みによって変わってきたのであろう。会場に応じてパフォーマンスを工夫することは、現在でも続いている。

黎明期の御諏訪太鼓がつくった国内外の太鼓グループとのヨコの繋がりは強く、小口大八が亡くなり代替わりした現在でも繋がりが続いている。例えば助六太鼓やサンフランシスコ太鼓道場、セントルイス御諏訪太鼓、ニューヨーク太鼓愛好会をはじめ、国内外の多数のグループが「岡谷太鼓まつり」や御諏訪太鼓が主催する毎年の新年会にさえもやってくる。その他にもグループの個人が来日し、あるいは諏訪を訪れた際には、個人として御諏訪太鼓を訪ね、練習等に加わっている。

こういった繋がりの強さは、小口が作曲して現在では世界のスタンダードとなった「飛龍三段返し」や「勇駒」といった曲を、誰もが一緒に演奏できることや、誰が来ても拒まずに共に太鼓を楽しむという姿勢があることと関係している。日本の芸能といえはタテの関係が強く、ともすれば家元的に君臨しがちである。しかし太鼓音楽は、まさにマイノリティだった黎明期から、常にヨコの繋がりをつくるようにつとめてきた。同一曲を演奏しないグループの場合、例えば助六太鼓などの場合には、新たな曲をコラボして創作・演奏するなど、奏法が異なっているにもかかわらず、繋がりは続いている。

(3) 御諏訪太鼓の打ち手たちを中心に、太鼓音楽を研究し記録することの意義について、何度も話あいをもってきた。戦後誕生した太鼓音楽ではあるが、二代目、三代目の世

代に入っており、グループのアイデンティティや自身が太鼓を打つことのアイデンティティを求めている。すなわち「グループの歴史を記録してほしい」という気持ちをもって人が多いことがわかった。例えば鼓童は、鬼太鼓座時代からのグループの歴史を『いのちもやして、たたけよ。』にまとめており、これを読んだ多くの太鼓愛好者の感想は「日本の太鼓の歴史がわかった」というひとことであった。しかし御諏訪太鼓をはじめとした鬼太鼓座以前からのグループの歴史は、かなり違ったものである。さらに鬼太鼓座が日本全国から集まった若者たちを養成し、大部分が独立してでていく場になっているのに対して、御諏訪太鼓をはじめとした地域に密着したグループは、何世代も同じ場所で太鼓を打ってきた。それだけに、彼らのグループの過去への思いは強く、本格的な記録を望んでおり、太鼓音楽調査・研究も、彼らの気持ちに応えるかたちですすめていくべきであると考えている。

以上、「太鼓音楽史序説」と題した本研究では、太鼓音楽の黎明期を太鼓音楽史全体の中に位置付けつつ、調査・研究をすすめてきた。この成果をもとに、今後は本格的な調査・研究そして分析をおこなってきたい。

#### <引用文献>

- 鼓童文化財団(2011)『いのちもやして、たたけよ。』出版文化社。  
中原ゆかり(2014)『ハワイに響くニッポンの歌：ホレホレ節から懐メロ・ブームまで』人文書院。  
林英哲(1992)『あしたの太鼓打ちへ』晶文社。  
茂木仁史(2003)『入門日本の太鼓：民俗、伝統そしてニューウエーブ』平凡社。  
Konagaya, Hideyo(2001) "Taiko as Performance: Creating Japanese American Traditions." *The Japanese Journal of American Studies* 12: 105-124.  
Otsuka, Chie 1997 *Learning Taiko in America*. Mater thesis. University of Tsukuba.  
Varian, HENDI and Seiichi Tanaka 2005 *The way of Taiko*. Berkley: Stone Bridge Press.

#### 5. 主な発表論文等

〔図書〕(計 1 件)

- 中原ゆかり(2014)『ハワイに響くニッポンの歌：ホレホレ節から懐メロ・ブームまで』人文書院, 270 頁。(第6章に、日本で太鼓音楽が誕生してから北米・ハワイに普及するまでの概要を記述)

## 5 . 研究組織

### (1) 研究代表者

中原ゆかり (NAKAHARA, Yukari)  
愛媛大学・法文学部・教授  
研究者番号： 00284381

### (2) 研究分担者 なし